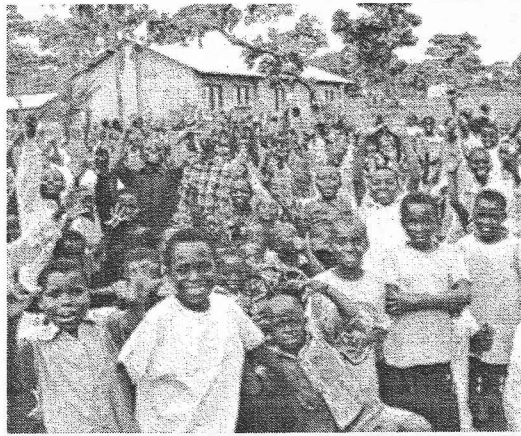


価値観の違いを越えて

# 共助の時代を築く

## 明日を作るのは若者

ともに生きる まとめ  
助け合いの精神を  
国際人道支援&景観保護



支援の衣服を着て喜ぶ難民キャンプの子供たち

今回で6年目になった「ともに生きる」をテーマにした特集。今年は、国際人道支援と景観保護の問題について考えてきた。具体的には、国際人道支援を使命とするピースウィンズジャパン(PWJ)、PHD協会、AMDAの3つのNGO(NPO)団体と、駒の浦(福山市役所)に取材したものであった。

## 貧困が被害を増大

◆多発する紛争・災害  
今年も終わりに近づいているが、世界ではいっこうに紛争や暴動が絶えない。今年もリビアやシリアなどアラブ諸国で多くの人の血が流され、今も流されている。イラクやアフガニスタンの状況もなかなか改善されない。

◆NGOの役割  
そんな中で、紛争地や災害地にいち早く駆けつけ、弱い立場の人を救済し、また貧困にあえぐ人たちの自立を支援しているのが国際人道支援NGOである。



タイの洪水のようす

## 何かあれば即救援

あつたら即救援」という意識を共有しているからだろう。そこに、困っている人に手をさしのべ、できる限りのことをしようという組織の強い意志を感じる。また、その思いを即行動に移せるだけの力量があるからでもある。また、それができなければ、組織の意味も失われるであろう。

災害の巨大化の背景にあるのは、都市化や貧困によるものも多い。都市化は人口の密集化でもあるので、いったん災害が起きると大勢の人が被災することになる。東日本大震災の折には、首都圏で大量の帰宅難民が出た

ずその行動の素早さである。東日本大震災に際しても、PWJもAMDAも直ちに現地に駆けつけさまざまな支援を行ったが、その決断と実行の早さに驚かされる。AMDAは、その時代

また、緊急だけでなく、さまざまな形で、現地の人々の自立を促す、息の長い根気のいる活動もしっかりとやっている。自立支援に必要とあらば、活動の領域を広げてでもやろうという意気込みも感じる。PWJのピースコーヒーの販売や、AMDAのスポーツ交流なども、そういう中から生まれてきた支援であろう。

### ■NPO・NGO

NPO…Non Profit Organizationの略。民間非営利組織。営利を目的とせず公益的な民間活動を行う民間団体の総称。

NGO…Non-governmental Organizationの略。非政府組織。どちらも民間組織という活動しているが、国際的に活動していることが多い。民間活動を行う民間団体の総称。

表が不在であったが、スタッフや会員が即行動を開始した。一人でも多くの命を助けるためには、初動の早さが決定的に重要になるからだろう。

このような対応ができるのは、組織の誰もが「何か

◆NGOを支える人々  
しかし、そのような活動はスタッフだけでできるものではない。資金面はもちろんだが、多くの志ある人たちが、さまざまな形で活動を支えているのである。

たとえばその一つにネットワークがある。非政府組織が素早く、時には危険地域でも活動できるのは、日頃から世界各地の人々とのネットワークを持っていて、その情報や協力を得ているからである。現地に住む人からの情報は、報道等ではなかなか伝わらない具体的なものが多くはすだ。また、現地の人たちのつながりを利用してできれば、活動もスムーズに行えることが多いのは言うまでもない。

こういうネットワークをうまく利用している点も、共通して言えることである。

◆人類愛を見る

そして、それら活動の根本にあるのが、「困っている人を見たら助ける」「人は誰も人間らしく生きねばならない」といった、人類愛というものである。

スタッフや、さまざまな形で協力している人たちに共通しているのがその精神で、だからこそ、素早くまた労を惜しまず働けるのであり、また時に困難な事態があってもそれを乗り越えることができるのである。そして、その姿に共感した人々が同心円のように広がり、組織の活動に協力し支えているのである。

ネットワークを生かす

そういった精神は、PWJやAMD Aとは活動スタイルが違う。PHD協会にも見られることである。292号で紹介したPHD協会は、何かあったら駆けつけるとか、物やお金を援助するという活動ではなく、人材を育てることによる国際協力を目指している。自分たちが働くことによつて一定の収入を得られるというところが、自分たちの手で暮らしを立てて行く道だと考えるからである。そのため地域に自立を目指すリーダーを育てようとしているのだ。そこにも、「共に生きる」精神を感じることが出来る。

現代は世界的に都市化が進み、かつて共同体の中で自然な形であった、互いに助け合う心を失わせてしまった。多くの人が自分のことに精一杯で、隣人のことにかまつてはいられないのが今の社会である。孤独死や自殺者が絶えない日本の風景は実に殺伐としている。だからこそ、助け合の精神は、日本人にこそ回復させねばならないものである。

日本人が、人道支援NGOの活動に参加することは、そのような精神を学び、都市化の中でどのような共助の社会を作



AMD Aが集めて贈った浴衣を着て祭りに参加した岩手県大槌町の子どもたち

◆高校生にもできる  
そう考えると、高校生活がもっと積極的になる。積極的なNGOの活動に関わってゆく意味は大きい。PWJやAMD

根元にある精神

Aでは、高校生もその活動に積極的に参加していることも伝えた。一緒に活動もできるし、募金やネットでの活動もできる。それぞれが許される範囲で活動すること、学ぶこともあるはずだ。



東日本大震災におけるAMD Aの医療支援チーム

明日を作つてゆくのは若者だとすれば、そのような若者の活動の中に希望があるといふことでもある。城西生にとつて身近なものでは、募金活動がある。12月にも赤十字募金が行われる。積極的に参加したい。

◆対立を越えて  
今回のもう一つのテーマが景観問題であった。日本では都市化や開発の進行とともに多くの伝統的な景観が失われてしまったが、その失われたもののおかげがえのなきに気づき始めた頃から、景観保存が強く叫ばれるようになった。法律も整備されて、今では多くの地域が「重要伝統的建造物群保存地区」に指定され、景観を守っている。

とはいえ、今も生活の利便性が景観保存かで問題になることがあふ。その一つが296号で紹介した鞆の浦である。

あなたは希望

◆共に生きよう  
多様化、グローバル化の中で様々な価値観があふれ、時に鋭く対立、憎悪し合うという現代において、その対立を



鞆の浦の穏やかで美しい風景

景観を生かして

また、高校生が進路を考える場合に、国際的に活躍するNGOはなかなか魅力的な場であるようにも思つた。あるいは、職を持ちながら、さまざまな形でこれらのNGOと関わること、魅力的な生き方のように思う。取材で出会った人たちが誰か、いきいきとして魅力的だったことが忘れられない。それは今回のPHD協会30周年記念行事の記事を読んでも感じられるのではないだろうか。

(2年 吉本まどか)

鞆では安全で衛生的な町を作るために埋立架橋を観保護運動の高まりの中で反対の声が大きくなり、鞆だけの問題ではなくなつてしまつた。また埋立架橋は鞆の観光地としての魅力をなくしてしまつてしまうと恐れる意見もあつて、鞆の人の意見も分かれている。

越える鍵は、互いに助け合い、共によい社会を作つて行くという精神である。取材を通じて、その大切さを改めて知ることができた。お互いに支え合いながらも生きる「共助の時代」が一日も早く来るように、高校生の私たちも努力しなければならいだろう。そのためにも、たとえば鞆の人たちの我が町を愛する心のよ